

氏名（本籍）	段壹文
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博 甲 第 9761 号
学位授与年月日	令和 3 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	曹洞宗布教教化活動に関する宗教学的研究—参禅、梅花講、オンライン坐禅会を事例として—

主査	筑波大学 教授	Ph.D.	木村 武史
副査	筑波大学 教授	Dr. phil.	小野 基
副査	筑波大学 教授	博士（宗教学）	津城 寛文
副査	筑波大学 教授	博士（文学）	徳丸亜木

論文の要旨

本論文は、第二次世界大戦後の日本社会の変化に対応して、曹洞宗が布教教化活動と位置づけ、展開した参禅・梅花講を、筆者自身の現地調査と歴史的考察を踏まえながら、現代日本社会における曹洞宗の布教教化活動を儀礼の観点から明らかにしようとする意欲的な論文である。

序章では、まず、本論の課題である曹洞宗布教教化活動についての先行研究を曹洞宗内の研究と曹洞宗外の研究とに分けて、それぞれの特徴を論じている。次に、儀礼に着目する本論の立場を説明するために、儀礼研究史を踏まえて、宗教的価値と実践のずれを解消するために儀礼が構築されるという宗教学者ジョナサン・Z・スミスの議論に歴史的観点を取り入れる本論の視点の独自性を説明している。また、本論文における儀礼概念の定義を提示している。そして、最後に、筆者の現地調査の説明と本論の構成の説明を行っている。

第一章「第二次世界大戦後の曹洞宗の布教教化活動」では、戦後の曹洞宗の布教教化活動を巡る歴史的変遷を取り上げている。第一節では、曹洞宗が発した布教教化方針と告諭の変遷に焦点を当てている。戦後直後は政府の指針に沿って新生日本建設を掲げていたが、やがて正法日本建設という宗の教えに立脚した方向へと転換した。1970年代終わりから80年代にかけて曹洞宗における人権意識が問題とされ、内外からの批判に対応する形で、人間・自己という考えを前面に押し出すようになった。そして、80年代からカルト問題が社会的に注目を受けると、こころ・共生という考えを掲げるようになった経緯を説明している。第二節では、戦前からの音楽布教の流れで成立した布教教化活動としての梅花講の初期の成立過程を考察した。特に曹洞宗教団内で尼僧が男女平等を唱える中で、女性への働きかけとして梅花講に積極的に関わろうとした経緯がよく見て取れる。第三節では、近代的な曹洞宗宗学の様々な流れを取り上げ、それらを伝統宗学、忽滑谷禅学、衛藤近代宗学、批判的な宗学研究や在家宗学といった学問的場での議論を説明している。学問的な議論と実践の場での布教教化活動が相互に関連する場も見られ、修行の意義が従来出家主義から在家主義へと強調点に移される流れなどを説明している。

第二章「曹洞宗布教教化活動—参禅」では、曹洞宗が重要な布教教化活動として位置付ける参禅について、筆者の現地調査を踏まえて詳細に取り上げている。第一節では、公表されている統計資料から、臨濟・黄檗と

比べて曹洞宗が開催している参禅の数が二倍近く多いこと、そして、都道府県別で参禅を催している割合の多い県などを指摘している。その中で、実地調査地である東京都内の参禅の標語は四種類ほどに分類できるとしている。第二節では、筆者が実地調査を行った曹洞宗大本山總持寺が提供している参禅コースの種類の変遷と趣旨について説明をしている。社会の状況の変化に応じて、總持寺側が参禅会の形態、内容を変えてきていることが明らかにされている。第三節では、總持寺の参禅会に参加者した人々の社会的背景について調査から明らかになった特徴を説明している。第四節では、筆者が参加した總持寺の参禅コース「禅の一夜」の叙述に基づいて、実際の布教教化の様子と、参加者にとって参禅会に参加するという儀礼的側面を説明している。第五節では、曹洞宗認可参禅道場として認可された都内の寺院の参禅会の様子を紹介している。

第三章「曹洞宗布教教化活動—梅花講」では、曹洞宗が参禅とともに重要な布教教化活動として位置付ける梅花講について、筆者の実地調査を踏まえて詳細に取り上げている。第一節では、日本全国の梅花講の開催数を提示している。参禅は東京都、名古屋市、京都府という三大都市圏の地域で盛況が見られるのに対し、梅花講は札幌市、仙台市、北九州市・福岡市という三大地方中枢都市圏で盛んに行われていることがわかった。第二節では、新宿区にある長光寺で行われている梅花講を取り上げ、梅花講に参加している女性たちの振る舞いにみられる儀礼的過程を叙述し、その儀礼的構造を説明している。第三節では、梅花流詠讃歌全国大会の様子を、2018年に筆者が参加した「平成30年度梅花流全国奉詠大会」を基にして、叙述している。曹洞宗の教団組織の上層部と布教教化の現場とが直結する場としての全国大会の実態を明らかにしている。

第四章「儀礼とその時空間の経験」では、参禅と梅花講において、僧侶側が構築する布教教化活動の時空間と参加者個人が経験する時空間の感覚との間の相違を取り上げている。第一節では、布教教化活動の時空間をコンタクト・ゾーンとして捉え、参禅者や梅花講員は一時的にヘネップ、ターナーの儀礼の構造を経験していることを示している。第二節では、都市部の寺院は「自然」と垂直的な「奥」という特性を持った場所を構成し、曹洞宗の教えを伝え、修行作法を広めるのに適した構造を持つが、参禅者や梅花講員が経験する都市空間の中における禅寺空間、坐禅堂・梅花講室では、場所の感覚の「外側」と「内側」の逆転が見られると指摘している。第三節では、時空間の観点から、参禅会、梅花講の参加者の時空間の経験、聴覚化した時間、時間の身体化といった側面を考察している。参禅では、物理的空間の縮小と隔離により、内面的な観察が行われるようになり、かえって内的空間と世界との一体感を感じられるようになり、曹洞宗の教義の探求が行われていることを示している。梅花講の空間においては、共同体としての内面的志向性が成立していることを指摘している。また、参禅者・梅花講員の経験では、デジタル的な時間感覚が消失し、「モノ」と「オト」による混沌とした時間に没入し、時間の感覚が再構築されている様子が見られることを指摘している。

第五章「儀礼とその内的な経験」では、曹洞宗が布教教化活動と位置付け、宗の教えを広める場としての坐禅や梅花講における経験について、僧侶側の意義付けと説明と参加者自身による理解と解釈との間には相違があるという点を、アンケート調査等から明らかにしている。第一節では、本山總持寺の参禅会における教団組織の上層部の僧侶、布教教化現場の指導者による参禅の経験の説明を取り上げている。曹洞宗側の参禅指導僧侶は宗の教えを教える場と捉えるが、難解な禅語を用いず、平易な日常言語を用いて、言葉数少なく説明している。そして、布教教化の効果が日常生活に浸透するように日常、自己といった言葉を強調している。梅花講では、御詠歌の歌詞を通して、曹洞宗の教義を伝えている。第二節では、参禅者と梅花講員による、それぞれにおける経験の内的意味の解釈を取り上げ、その解釈の特徴を取り上げている。日本人参禅者による参禅経験の説明には「こころ」、「健康」、「体験」という言葉が見られ、欧米人参禅者の参禅経験には「体験」、「日本文化」という表現がよく見られ、梅花講員の詠唱経験には「供養」、「向上」、「仲間」、「こころ」といった解釈がよく見られることなどを論じている。

第六章「IT 布教教化と儀礼個人化」では、レジョン・オンラインの一例として曹洞宗における最新技術

を用いた布教教化を取り上げ、考察を行っている。第一節では、1995年から始まった曹洞宗のIT利用の歴史を振り返り、現在の公式ホームページ、公式YouTubeチャンネル、公式アプリなどの内容を分析している。そして、曹洞宗国際センター所長の藤田一照が主催するオンライン寺院を取り上げている。第二節では、2006年からオンライン座禅会を行っている木ノ葉禅堂（つくば市）のオンライン坐禅会を取り上げ、ITの利用が生み出した儀礼における「宗教権威」と「個人」の力関係の変容を考察した。例えば、オンライン坐禅会においては、参禅指導僧侶の関与が少なくなり、僧侶の参禅者に対する宗教的権威が弱まっているのに対して、参禅者は坐禅に関する宗教知識の習得と儀礼の遂行を自らの意志とするようになり、参禅者の個人的権威がより高まっていると考察している。

終章では、本論文の各章における議論の要約と今後の課題を説明している。

審査の要旨

1 批評

本論文は、現代日本社会における曹洞宗の布教教化活動の実情を明らかにするために、著者自ら参禅、梅花講、オンライン坐禅会に参加し、参与観察やアンケート調査などの実地調査を通して得られた一次資料を考察の対象とし、伝統的仏教教団である曹洞宗と現代日本社会との相互交渉の諸側面について考察を行った。資料的にも著者の調査、研究なくしては明らかにならなかった諸側面があり、高く評価することができる。

本論文では、第二次世界大戦後に日本社会が変化していく中で、教団としての曹洞宗が民主主義的価値である人権という価値観に照らし出して自らの宗教的教義を再検討するように促された事例や、教団側の布教教化という意図とは異なり、参禅、梅花講の参加者が各自各様の仕方ですれらの場での経験を解釈し、受け止めている事例を明らかにし、伝統的仏教である曹洞宗と社会で生きる一般人との間で成立しているコンタクト・ゾーンを巡って両者の間に様々な解釈の差異が生じていることを示している。参禅や梅花講において構築されている時空間の経験とその解釈においても教団側と参加者との間には相違が見られることも示している。また、ITという新たな技術を布教強化に積極的に導入することにより、寺院という空間的制約を取り払い、参禅の機会を提供できるようになっているが、同時に、寺院側が意図していない関係が僧侶と参禅者の中で起きていることを示す等、曹洞宗の現代社会における布教教化活動の新たな側面を描き出し、学問的にも寄与するところが大きいと判断できる。

このように本論文は、曹洞宗の布教教化活動を、実地調査と資料研究を通して、現代日本宗教史研究の中に位置づけることに成功しているが、曹洞宗僧侶側の活動や参加者の日常生活における宗教については更なる検討が必要である。しかし上記の問題点については今後の研究を深めることによって解決できるものであり、本論文の価値を損なうものではない。

2 最終試験

令和3年1月14日、人文社会科学研究所学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。